

用語について（Ⅲ）

山口青邨

一つの言葉、熟語が二つとか三つの漢字から成立つてゐるが、その時一つの字は常用漢字にあるが、他の字がないと、これは一つは漢字と他のものは假名で書かなければならない——、これを漢字假名の抱き合せと言つてゐるが、これはいかにもみつともない。みつともないばかりか、意味がわからないことがある。もともと漢語として意味があつたので、それを假名で書いたのではわからなくなるのが當然である。

私達は詩や歌や俳句を考へる時、文字といふことに極めて敏感である、文字は意味を運ぶためのものではあるが、見た眼で、その文字の形、並び方、組合せ、いろいろのことで美しいとも感じ、醜いとも感ずる。かういふ短い詩では文字は畫のやうな要素をもつことがある、意味だけが通ればよいといふわけには行かない。詩には調べといふことが大切である、内容と共に大切なのである。又調べが内容によつても決まつてくるし、聲を出してうたひ、耳で聞いた場合と同じやうに、眼で見た時の文字の美しさ、醜さがあるわけである。私は詩では——俳句や歌では一應はどんな字を使つてもよいといふことを支持する。

然しそれはどこまでも作品の効果を擧げるためにすることである、實際は私はなるべくむづかしい字は使はないやうに、誰にもわかるやうな文字を使ふやうに心がけてゐる。

かういう考へ方であつて、しかも時にむづかしい字を使ふのはさうしなれば俳句がよくなるらないといふ止むに止まれない場合である。人をおどかすために漢語や外國語を使ふつもりはない、又、さうすべきではない。